



第33回日本レーザー医学会総会

会長 : 大阪大学・工学研究科 / 生命機能研究科 粟津邦男 教授

本大会のテーマは「生体組織光学が拓く新しいレーザー医療」とさせて頂きました。このころは、医療機器においてはレギュラトリーサイエンス、デバイスラグなどという言葉が飛び交い、レーザー医療機器においても、未承認機器、医師個人輸入、医療安全といった単語が飛び交うようになっていました。そこで私はサイエンスの原点に帰り、種々の対象となる疾患部位・組織はレーザーを浴びたときにどのように振舞うのか、たとえば生体内でのレーザーの深さ方向への分布や散乱、それに伴う発熱、活性酸素の発生などの物理-化学プロセスを踏まえての議論、いわゆる「生体組織光学(Tissue Optics)的アプローチ」を近い将来臨床に根付いてもらうためのきっかけとなる大会にしたい。こう考えてテーマを決めた当時のメモがあります。大会は皆様の暖かいご支援ご協力にて無事終了しました。改めて大阪大学へお越しいただいた方々に厚く御礼を申し上げます。

その成果の一つとして、平成28年6月29日に厚生労働省医薬・生活衛生局医療機器審査管理課長名で「レーザー医療機器の承認申請の取扱いについて」. 薬生機審発0629第4号、が発出されたことは大変喜ばしいことでした。特にこの発出に小生研究室出身で当時PMDA審査に関わっていた複数の卒業生が寝食忘れて取り組んでいたことは、ここで特筆させて頂きたいと思います。

ただ残念ながら、まだ昨今のレーザー・光科学の急速な進歩に対し、この恩恵をレーザー医療が被るには、数年以上のタイムラグ(デバイスラグ)が生じています。レーザー医療をさらに優れた診断・治療法と位置づけると共に開発タイムラグを短くするには、対象となる生体組織と種々レーザーとの生体相互作用に対する知見の共有とそれを生かす治療法の開発、迅速なデバイス開発などが喫緊の課題となっていることは私が大会長を務めさせて頂いた時からまだ大きく改善されていません。大変忸怩たる思いをいたしてはおりますが、研究・学問の進化は誰にも止められません。西脇大会長の今大会において、近未来志向の素晴らしい取り組みがなされている事の重みをしっかりと受け止めて、33回大会長の折に胸に秘めた思いを形にすべく一研究者として引き続き尽力していきたいと考えております。

(粟津教授の文章そのまま)

第33回総会



第33回日本レーザー医学会総会 会長招宴 2012年11月9日 千里阪急ホテル